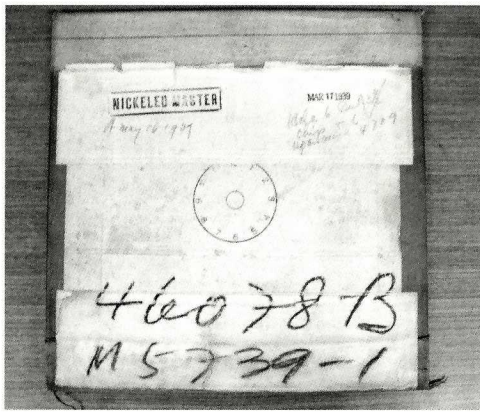


民博の収蔵庫に納められたレコード原盤



原盤の紙製ケース。レコード番号、原盤番号などの情報が書き込まれている

原盤のケースに貼られていたレーベル。台湾で発売された「黒リーガル」



さらに一九二〇年代後半から電気録音が普及すると、音量や音質を電氣的に調整することができるようになり、マイクなしでは実現することのできない音楽が生まれるようになった。ささやくようなソフトな歌い声でも、バランスを調整して、楽器の音にかき消されることなく録音することができるようになったのである。まさに、レコードと電気録音は、新しい音楽を生み出したといってもよい。

さて、レコードが急速に普及した時代は、日本が欧米の列強諸国に対抗して、アジア各地に進出し競争へと突入していく時代と重なっている。このような

時代を背景とし、日本の統治下に置かれた東アジアでは、どのような音楽文化がレコードとともに展開したのだろうか。

外地録音の存在は、東京や大阪で録音制作された内地向けのレコードが、外地の音楽市場を支配したのではないことを物語っている。政府の方針に沿って教えられた唱歌などは、内地でも外地でもある程度共通していたかもしれない。しかし、内地の流行音楽をそのまま外地にもち込んで現地社会の人びとには受け入れられなかったのだろう。

だからといって、内地と外地の音楽がまったく無関係だったわけではない。外地の流行歌の編曲や伴奏には、内地の人間が関わっていたことが多かったし、そもそも、外地の音楽家のなかには、内地で音楽を勉強した者も少なくなかった。その結果、内地の音楽のメロディーを下敷きにして作られた曲があったり、内地の曲とは知らずに外地の人びとが受け入れた曲もあったようだった。

内地と外地は、別の音楽市場を形成していたが、そのあいだにはさまざまな相互関係があった。東アジア音楽の近代史を理解するためには、実際にどのような音楽が生み出され、そのなかで内地と外地のどのようなやり取りがあったのかを明らかにする必要があるだろう。日本コロムビア外地録音は、それを解明するための非常に重要な資料である。

モノグラフィ

日本コロムビア 外地録音

福岡 正太（ふくおかしょうた）
本館文化資源研究センター

銀色に輝く円盤。レコードのようだが、よく見ると普通のレコードとは違う。これはレコードを製作するための原盤である。



原盤のケースに貼られていたレーベル。台湾にて発売された「コロムビア」

日本コロムビア株式会社（現コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社）は、戦前、ソウル、上海、ハルビン、台北などに支店や子会社をもち、それぞれの地域の人びとに向けたレコードを製作販売した。わたしたちは、それらを外地録音とよんでいる。外地録音レコードのプレスは、同社の川崎工場でおこなわれたため、戦災を免れた同工場にレコード原盤が残された。

その後、レコード原盤が廃棄されそうになったとき、その価値に気づいた一人の技術者の努力で、その貴重な資料は今日まで残されることになった。そして一九八〇年代はじめ、その複製録音テープを購入した民博に原盤が寄贈された。公式に民博に登録された原盤の数は六八〇〇枚、レコード六八〇〇面（両面レコードで三四〇〇枚）分のほら。



「原盤」には、溝の凹凸が逆のものを含め、いくつかの種類がある